

肱川の川漁も昔ながらの風物詩の一つ。6月から12月には鮎漁、8月から5月にかけては蟹漁が行われる。現在、肱川には約1,000人の川漁師がおり、鰻や鮎なども肱川の恵みとして知られている

営みの 風景に 出会う。



川は生命を生み出す。川は産業を育む。川は物や人を運ぶ道となる。
そして川は集いの場となり、人々に癒しと和みを与えてくれる。
全長103km、愛媛県最大の二級河川である肱川もまた然り。
伊予の小京都・大洲の営みは、いつの時代も肱川とともにあった。

Meet a living landscape.

Rivers give rise to life. They foster industry and provide a route along which people and freight can be transported.

They serve as a gathering place, soothing people and providing tranquility.

Ehime Prefecture's longest Class A river at a total of 103 kilometers in length, the Hijikawa River is all of these things, and more.

The river has been a constant throughout the history of Ozu, which is known as the "Little Kyoto of Iyo."

鳥坂峠を源とし、河辺川や小田川など470余りの支流を集めて伊予灘へと注ぎ込む肱川は、愛媛県を代表する大河。もともとは「比志川」や「比治川」と表記されていた。その名の由来には諸説ある。よく知られているのは、まるで川が人間の「肘」のように曲がっているからという説。また、古くは土のことを「ひじ」と呼んでおり、土が多い川であることから名付けられたともいわれている。

肱川は、古より大洲の人々の営みに無くてはならない存在。特に大正時代、肱川には40余りの河港があり、400艘もの川船が往来していたと記録されている。つまり川が物流の道としての役目を果たしていたのだ。川船によつて運搬されていたのは、上流部で切り出された木材や中流部で収穫した農産物など。反対に河口から上流へと漕上する際には、船に雑貨や食料品などが積み込まれ、山里では手に入りにくい物資を人々に届けていた。また、木材を筏状に組み上げて運ぶ筏流しもこの川の風物詩であったが、いずれも昭和の初めに姿を消した。